

下谷坂本富士 開山式

6月30日（土） 10時齋行

・浅間神社 開山式について

富士浅間神社例祭である「お山開き」は、毎年6月30日と7月1日に齋行され、1年間でこの2日間のみ、御神体であります下谷坂本富士が解放され、登拝が可能になります。

30日の10時より開山式として御仮屋での神事後、祓主を先頭に氏子崇敬者が列立し「六根清浄」を唱えつつ登拝をし、頂上にて四方を祓い天下泰平と五穀豊穰を祈りを捧げ、本山である富士山に向かい遥拝をした後に下山をして祭事のすべてを終わります。

多くの提灯や七夕飾りで彩られた境内に、山を登る子供の声が響き半年の納めと新たな半年の始まりを告げる当社のお山開き。期間中、全ての祭典・催しが一般の方のご参列・ご参加が可能となっておりますので、お誘いあわせの上、ご家族でお運び頂ければ幸いです。



・浅間神社 坂本富士について

当社の境内に聳^{そび}える富士山は、江戸時代に富士信仰を布教した南沢正兵衛の門人である東講 講元 山本善光が、氏子はもとより江戸八百八町に広くご浄財を募り、富士山より岩石を船積みして運び、隅田川より荷車にて当地まで陸送をし、天明年間（1782年）に築山されたものです。そのご浄財の額もさることながら当時の運搬技術や運搬環境を思うと、その大変な労力とそれに増しての信仰心の力強さに驚嘆させられます。

今では廃してしまっておりますが、昭和の中期まで、お山の門前には富士五湖を模した池が5つ並び、胎内洞窟を模した大きな横穴もあったそうです。そこまでの精巧な再現から当時のこの地域の方々の想いの強さが伺い知れます。築山されてから230年の月日が経ちますが、登拝が2日間に限定されていることや、蔦や草の根がしっかりと張り巡らされて土を強固にするといった先人の山守りの知恵に護られ、今も昔ながらの荘厳な姿を見せています。



昭和54年 国の重要有形民俗文化財 135号に指定

大祓式

6月30日（土） 16時齋行

・おおはらえしき大祓式・かたしろ形代・ち茅の輪神事について

大祓式は平安時代に大宝律令に記され、今に至るまで連綿と受け継がれてきた日本最古の公の神事です。一年を半期に分け、毎年6月30日と12月31日に広く社会をはら祓い清めて世の平安を願い、知らず知らずのうちに犯した個人の罪やけがれ穢はられを祓い清めて残す半期の息災を祈ります。

大祓式では大祓詞の奏上の後、人の形に切り抜いた「形代」に罪やけが穢はられを移し、切麻にて半年間のけが穢はられを祓い、旺盛な生命力が神秘的な除災の力を有すると伝えられる茅草で作られた「茅の輪」の中を左、右、左と八の字に三回通り、半年間の無事を感謝するとともに、残りの半年間の無病息災を祈ります。

半年間を過ごし、気が枯れた状態（けがれ穢）を、大祓詞の奏上・形代でのおおはらえことば祓い清め・茅の輪神事と、幾度も祓えをすることにより、気をよ良める（清まった）元の状態に戻していくのです。

祭典の10分前よりアナウンスをさせていただきます。一般の方のご参列が可能となっておりますので、お誘いあわせの上、ご家族でお運び頂ければ幸いです。

蛇土鈴 (龍神守)



初穂料 800 円

かつて下谷の界隈が飢饉に見舞われ、水も干上がった時、当社の井戸水だけが枯れなかったという故事にちなんで奉製をいたしました。古来より蛇は龍の生まれ変わりとなされ、富士山の頂上には龍神と崇められるタツタヒメ（辰）がお鎮まりになっているといわれています。どうぞ頂上にてご登拝の後にお受けください。

茅の輪守



初穂料 500 円

旺盛な生命力が神秘的な除災の力を有すると伝えられる茅草で作られた「茅の輪守」です。茅の輪を祀れば子孫を疫病、そして災いから守ると言われました。玄関の内外や柱等に止めるなどしてお祀り頂き、ご家族の除災招福・無病息災を御祈願下さい。

朝顔土鈴

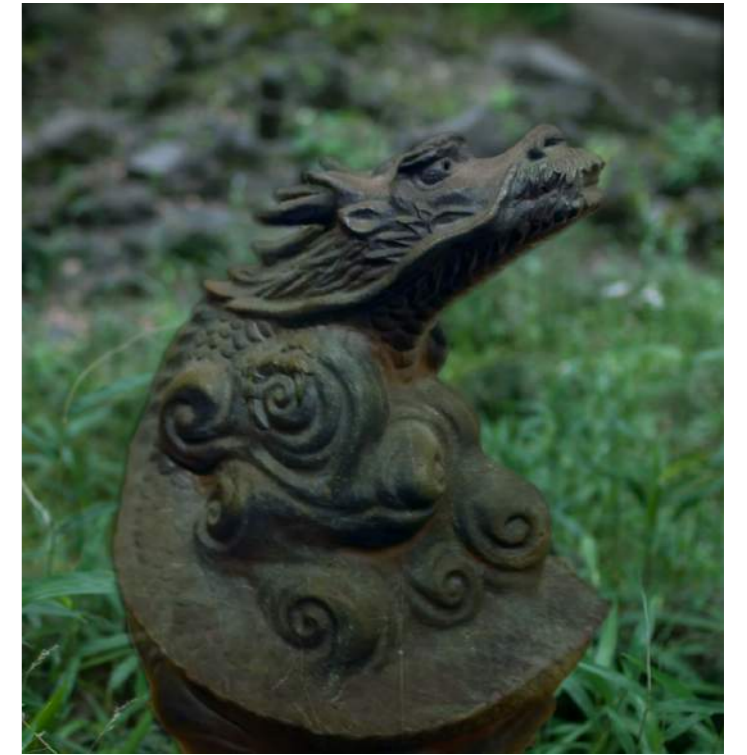


初穂料 800 円

残り半年の心身健康を願い、入谷の朝顔を模して作られた土鈴です。入谷の朝顔が有名になったのは江戸末期の文化・文政の頃。この地を中心として江戸の町に一大ブームを巻き起こっていました。入谷朝顔市は、今も江戸情緒豊かな夏の風物詩として、多くの人で賑わいを見せています。

・富士塚と龍神信仰 ～水分の龍と蛇～

「不二（二つとない）」、「不尽（尽きることがない）」などが、いわれとされる富士山。活火山である富士の山頂には、噴火を絶つ水神・龍神と崇められるタツタヒメが鎮まれ、富士山を御神体とする浅間神社には水を司る女性神である木花開耶姫コノハナサケヤヒメがお祀りされています。古来より龍神は雲や雨水を司る神として農民からの信仰が篤く、蛇は龍の化身とされ、その脱皮は新生を意味し、蛇の出現は瑞祥と考えられてきました。



現在坂本富士では途絶えてしまっておりますが、江戸時代にはお山開きの日に降龍を見立てた麦藁で編んだ蛇を水難消除として水回りに吊るしたそうです。そういった水神様とのご縁からか、かつて下谷の界限が飢饉に見舞われ水も干上がった時も、当社の井戸水だけが枯れなかったという故事が今も伝えられています。また、古来より富士登拝は公的な性格も持ち合わせ、個人の願いを持って登るのではなく、そこには行けない多くの人の幸せを願って、無事登れていることの感謝を噛みしめ登るものとされています。道中端々で自然の驚異を感じながら粛々と登拝をすることで、本当の願いだけが残り、浄化・再生されるのです。水の神様、山の神様への感謝を込めて年に一度のご登拝を頂ければ本意に尽きることと存じます。